



Title	太子の「知」 : 上博楚簡『平王與王子木』
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2007, 45, p. 57-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61091
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太子の「知」——上博楚簡『平王與王子木』——

湯浅邦弘

序言

『上海博物館藏戰國楚竹書』第六分冊(馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇七年七月)には、楚国の王や太子に関わる文献が複数収録されている。本稿では、その内の『平王與王子木』を取り上げ、考察を加えてみたい。

初めに、『上海博物館藏戰國楚竹書』第六分冊の説明に従い、『平王與王子木』の竹簡形制を掲げておく。簡数は全五簡。すべて完簡で、簡長三三 cm、幅〇・六 cm、厚さ〇・一二 cm。両道編綫。右契口。簡頭から上契口までは九・五 cm。上契口から下契口までは一五 cm。下契口から簡末までは八・五 cm。満写簡で、上下に留白はない。字数は各簡二二〜二七字、計百十七字。篇題はなく、「平王與王子木」とは、文頭の語句に基づく仮称である。

次に、竹簡の接続について、釈文は、二、三、四簡が

連続すると説くが、一簡と五簡については明言を避ける。これに対して、凡国棟は、第一簡の次に第五簡が入り、全体として通読できると説く。筆者も、この説に賛同し、以下では、一、五、二、三、四簡という接続で、全体を解読してみたい。

なお、第一簡冒頭の「智(知)」字(写真参照)について、釈文は、前簡(残欠)に接続する末字とし、沈培は、『平王問鄭壽』第六簡末尾に接続すると推定するが、陳偉は、本編の篇題であると説く。この点については、改めて後述する。

第一簡冒頭部



一 『平王與王子木』 釈読

まず、『平王與王子木』の原文、書き下し文、現代語訳を掲げる。なお、ここに言う原文とは、『上海博物館藏戰國楚竹書』第六分冊の原釈文（担当は陳佩芬氏）を基に、諸氏の見解を参考にしつつ、最終的に筆者が確定したものである。文字の認定・釈読に問題があるものについては、後の語注で解説を加える。また、01・02などの数字は竹簡番号、「■」は墨釘を表す。

01 知■注し。 競平王命王子木至城父、過申、煮食於豨莫、成公幹友05跪疇中。王子問成公、「此何」。成公答曰、「疇」。王子曰、「疇何爲」。02 曰、「以種麻」。王子曰、「何以麻爲」。答曰、「以爲衣」。成公起曰、「臣將有告、吾先君03莊王至河淮之行、煮食於豨莫、醢菜不饗。王曰、「醢不盡」。先君04知醢不盡、醢不饗。王子不知麻、王子不得君楚、邦國不得。

知。 競平王、王子木に命じて城父に至らしむ。申を過ぎ、豨莫に煮食す。成公幹友、疇中に跪す。王子、成公に問う、「此れ何ぞや」。成公答えて曰く、

「疇なり」。王子曰く、「疇とは何爲るものぞ」。曰く、「以て麻を種うるなり」。王子曰く、「何をか麻を以て爲るや」。答えて曰く、「以て衣を爲るなり」。成公起ちて曰く、「臣將に告ぐること有り。吾が先君莊王、河淮の行に至り、豨莫に煮食するに、醢菜、饗かず。王曰く、『醢には盡せず』。先君、醢に盡せず、醢に饗かざるを知る。王子、麻を知らず。王子、楚に君たるを得ず、邦國得られざらん」。

知。 楚の平王は、王子木（建）に命じて（楚の北辺の）城父の守りに赴かせた。（王子木は城父に向かう途中）申の地を過ぎ、豨莫の地で食事を取った。成公幹友が麻畑の中に座っていた。王子は成公に問うた。「これは何か」。成公は答えていった。「麻畑です」。王子は言った。「麻畑とは何をするものか」。（成公は）言った。「麻を植える畑です」。王子は言った。「麻で何を作るのか」。（成公は）答えて言った。「衣服を作るのです」。成公は立ち上がって言った。「私は、申し上げたいことがあります。我らが先君の莊公は、かつて河淮の軍役に際して、（あなたと同じく）豨莫の地で食事を取られましたが、燠製品は炊かれませんでした。（そして莊）王はおっしゃい

ました。『発醜品には蓋をしないのだ』と。(このように莊王は俗世の細かなことまで「存じで」発醜品には蓋をせず、薰製品は炊かれませんでした。(それなのに)王子は、麻のことさえ「存知でない。王子は、楚の君となることはできず、国を得ることはできないでしょう」。

語注を加えておこう^(注と)。

冒頭の「知」字については後述する。

「競平王」は、上博楚簡『平王問鄭壽』の冒頭にも同様に見える。「競」字について原釈文は、『平王問鄭壽』の解説部分で、この字を平王にかかる修辭であると取り、『説文』に「彊語也」、「広雅」釈詁四に「競、高也」とあるのを指摘して、結局は「楚平王」の意であると説く。ただ、『平王問鄭壽』の竹簡該当部分は、文字が不鮮明で判読しづらい。あるいは別字の可能性も想定されるが、ここでは、とりあえず、原釈文に従う。

「平王」は靈王の後の楚の王、康王の弟に当たる。在位は前五二八〜前五一六年。

「平王命王子木至城父」とあるが、楚の平王の太子の建が、讒言によって楚の北辺の城父の地の守りを命ぜられたことについては、原釈文が指摘するとおり、『史記』

楚世家、『左伝』昭公十九年に記載がある。

「煮食於𧠦寔」の冒頭の二字、原釈文は「暑食」とし、張崇礼は、「暑、食於𧠦寔」と句読するが、意味が通りにくい。ここでは、凡国棟が「煮食」と読むのに従う。「𧠦寔」は未詳であるが、原釈文が指摘する通り地名とするのが良からう。「城父」に赴く途中の地を指すと思われる。なお、何有祖、凡国棟は、後の字を「寔」、張崇礼は「寔」に読むが、いずれにしてもこの二字で地名とする点は同様である。

「成公幹友」の「友」字は、張崇礼が他の楚簡文字の用例を根拠に「友」と読むのに従った。「幹友」は「成公」の名であろう。原釈文はこれを「𧠦」字に認定し、陳偉は「遇」に読む。なお、後述のように、この説話と酷似する『説苑』辨物篇では、「成公乾」に作る。

「跪於疇中」の冒頭字、原釈文は「聖」と隸定し「聴」の意と解するが、陳偉は「跪」に読み、張崇礼は、ほぼ同意で「坐」に読む。後文に「成公起曰」とあるので、「跪」または「坐」の方が対応がよいと思われる。

「疇」字、原釈文は「壽」に作り、「草名」とするが、後述の『説苑』を参照して「疇」に読んだ。陳偉、凡国棟も「疇」に読み、『礼記』月令の「可以糞田疇」の孔疏引く蔡邕に「穀田曰田、麻田曰疇」とあり、『国語』周語

下の「田疇荒蕪」の韋昭注に「穀地爲田、麻地爲疇」とあるのを指摘する。

「莊王」は、平王の四代前に当たる楚王。在位は前六一三〜前五九一年。『上海博物館藏戰國楚竹書』第六分冊に、莊王に関わる文献として、『莊王既成』が収録されている。

「河淮之行」は、河水、淮水地域への軍行の意であろう。「淮」字、凡国棟は、「誰」に読み、「邕」に通じ、「澤」の意であると説く。陳偉は、「河雍之行」と読み、『左伝』宣公十二年記載の邲の役を指すとす。確かに、晋と楚が戦った邲の戦いでは、黄河流域が主戦場となり、楚の輜重部隊は「衡雍」の地に駐屯しているの、その可能性は高い。いずれにしても、ここは、かつての莊王の行軍を指すであろう。

「醢菜不爨」は、難読字の続く難解な箇所である。原积文は「醢盞不爨」とするが、張崇礼は「醢菜不爨」に読み、「醢」は「醋(酢)」の意であると説いた上で、「醢菜不爨」とは、『斉民要術』に説く「作酢法」の一つで、「甕常以綿幕之、不得蓋」の意であるとす。但し、「醢」は次の句に「醢不盞」とあり重複するため、ここでは、「醢菜不爨」に読み、(莊王は食事の際)燻製品は炊かれませんでした、の意と取る。後句の「醢不盞」とともに、

食品または調理法に関する知識を説いた句であると考えられる。「醢不盞」の「醢」字、原积文は未积であるが、張崇礼に従い、「醢」に読んだ。

なお、第四箇末尾の「王子不得君楚、邦國不得」は、ちょうど箇末で終わっている。この後に墨鈞などがないので、ここが全体の末尾かどうかは確定できない。後述の通り、『説苑』辨物篇では、ここに該当する部分を「吾子其不主社稷乎」に作り、さらにその後、「王子果不立」という結末を記して終了している。

二 『説苑』辨物篇の説話

本篇の内容について、原积文は、『史記』楚世家、『左伝』昭公十九年に、楚の太子建が、城父の地の守りを命ぜられた記載があることを指摘する。確かに、本編の冒頭にはそのことが記されているが、以下の内容とは直接関わらない。これに対して、陳偉は、『説苑』辨物篇に類似の説話があることを指摘する。

そこで、次に、『説苑』の内容を確認してみよう。

王子建出守於城父、與成公乾遇於疇中、問曰、「是何也」。成公乾曰、「疇也」。「疇也者何也」。曰、「所以

爲麻也。「麻也者、何也」。曰、「所以爲衣也」。成公乾曰、「昔者莊王伐陳、舍於有蕭氏、謂路室之人曰、『巷其不善乎。何溝之不浚也』。莊王猶知巷之不善、溝之不浚、今吾子不知疇之爲麻、麻之爲衣、吾子其不主社稷乎」。王子果不立。

王子建出でて城父を守らんとし、成公乾と疇中に遇い、問いて曰く、「是れ何ぞや」。成公乾曰く、「疇なり」。「疇なる者は何ぞや」。曰く、「麻を爲る所以なり」。「麻なる者は、何ぞや」。曰く、「衣を爲る所以なり」。成公乾曰く、「昔者莊王陳を伐つに、有蕭氏に舍り、路室の人に謂いて曰く、『巷其れ善からざらんか。何ぞ溝の浚わざらんや』。莊王猶巷の善からず、溝の浚わざるを知るに、今吾子疇の麻を爲り、麻の衣を爲るを知らざれば、吾子其れ社稷を主らざるか」。王子果たして立たず。

細部を除けば、『平王與王子木』とほとんど同内容である。両者は、同工異曲の別伝であると言つて良いであろう。

細部について一応確認しておく、『説苑』では、王子建と成公乾とが出会った地名が記載されていない。

「疇」と「麻」に関する問答は全く同じである。

その問答の後が若干異なる。『説苑』では、「成公乾曰く、昔者莊王陳を伐つに……」とのみあるが、『平王與王子木』では、「成公起ちて曰く、臣將に告ぐるごと有り。吾が先君莊王……」と、成公乾が憤懣しつつ立ち上がり、面と向かつて王子木に直言するという記述になっている。また、『説苑』では、莊王が世俗の細事にも精通していたことを示す例として、道路や溝の清掃をあげているのに対し、『平王與王子木』では、難読字もあつて確定しづらいが、食料に関する知識をあげているのが異なる。

さらに、この成公乾の発言が終わつた後、『説苑』では、「王子果たして立たず」と、やはりこのような世間知らずの王子は王になれなかつたのだ、という結末が記されるのに対して、『平王與王子木』では、そうした結末が記されていないという相違もある^(注3)。

ただ、これらはまさに細部の相違であつて、話の骨格と主題は全く同一であるといつて良いであろう。王子は、やがて王となる可能性を持つて育つのである。もちろん宮中で大切に育てられる訳であるが、一方で、世俗の事情にも精通していなければ、民情を理解することはできない。「疇」が何をするための土地なのか、「麻」が何を作するためのものなのかさえ知らないようでは、国家の統

治はできないのである。

三 『平王與王子木』の著作意図

このように、『平王與王子木』は、『説苑』辨物篇記載の故事とほとんど同内容である。それでは、両者の著作意図は、どのように考えられるであろうか。同内容である以上、編著者の意識も同一であると考えて良いであろうか。

まず、『説苑』は、編者劉向が、成帝の教育用に献上するという明確な目的を持って編纂したものであり、そこに劉向の政治的主張が反映されていると考えるのも、この書に対する通常の見方となつている(注5)。また、現行本『説苑』は、宋の曾鞏が残本を整理したものであるとされ、資料的な不安が全くない訳ではない。しかしこれは、現行本『説苑』が宋代において、原本『説苑』と無関係に偽作されたことを意味するのではない。曾鞏の輯本も、反質篇を除く十九篇がほぼそのまま収録されていると考えるのが通常である(注6)。

この『説苑』の中の「辨物」という篇に、この故事は収録されている。趙善詒『説苑疏證』(華東師範大学出版社、一九八五年)の分章によれば、この篇は全三十二章

からなり、この故事は、その最終章として配置されている。ただ、辨物篇全体は、この王子建と成公乾の問答を初め、孔子と顔淵の問答(第一章)、斉の景公にまつわる故事(第九章)、また、「五嶽とは何の謂ぞや」(第六章)、「四瀆とは何の謂ぞや」(第七章)といった語句の知識に関する短い文言、さらには度量衡に関する知識(第十三章)など、問答体、短文、論説文など文体も様々に、古今の「辨物」に関する話を掲載している。漢代皇帝の帝王学の一環として、こうした「物を辨える」ことが重視されたのであろう。

これに対して、『平王與王子木』は、大部の文献の中の一冊だったのかどうか、他の著作物と一括して著述されたものなのかどうかなど、詳細は未詳である。ただ、同じく、楚の平王に関する故事を記した『平王問鄭壽』と竹簡形制が同一であることから、『平王與王子木』と『平王問鄭壽』との区分を越えて、竹簡の再配列を検討しようとする試みも既になされている。

例えば、『平王問鄭壽』の第六簡末尾「臣弟」について、沈培氏は、「臣弗」と読んだ上で、『平王與王子木』第一簡の冒頭の「知」字に接続し、その後の数字分の空白の後、『平王與王子木』本文が始まると説いている。確かに、『平王與王子木』の第一簡の「知」字は、それに続く、

本文から数字分離しており、不自然な表記に見える。しかし、この沈培氏の説によれば、『平王問鄭壽』の末尾は、鄭壽の「弗知（知らず）」というそつけない答えで終了することになり、より不自然な印象となる。

また、何有祖氏は、『平王與王子木』第四簡末尾の「邦國不得」に、『平王問鄭壽』第七簡が接続すると考える。確かに、『平王與王子木』第四簡が末尾簡であるとすれば、墨釘や墨節があつてほしい所であるが、ちょうど本文が竹簡の下端で終了しているため、この点を確認できない状況にある。本文を竹簡末尾で筆写し終えたので、あえて墨釘などを打たなかつたという可能性も考えられ、また、『説苑』辨物篇のように、本来は、この話の結末が別簡（残欠）に記されていて、その直後に墨釘などが打たれていたという可能性も考えられる。

いずれにしても、こうした配列案が提示されるのは、『平王問鄭壽』と『平王與王子木』とが竹簡形制を同じくしているからに他ならない。また、同様に『上海博物館藏戰國楚竹書』第六分冊に収録された『莊王既成申公臣靈王』も、楚の莊王・靈王に関する故事を記すものであるが（注七）、『平王與王子木』とわずかに竹簡長が異なるだけで形制はほぼ同じである。さらに、竹簡形制は異なるが、『上海博物館藏戰國楚竹書』第四分冊所収の『昭王

毀室』、『昭王與翼之牌』も、楚王の故事という点では同じである（注八）。こうしたことから、上博楚簡の中には、楚の王に関する故事集のような文献が含まれており、本篇もその中の一つであつたという可能性が考えられるのである。

筆者は、先に、『昭王毀室』、『昭王與翼之牌』を取り上げ、その読者対象として、昭王以後の楚の太子、貴族が最も相応しいという可能性を提示したが、この『平王與王子木』についても、同様に、楚の太子教育の教科書であつたという可能性が考えられる。世間知らずの王子木（建）は結局王位にはつげず、太子珍が即位して昭王となつた。想定される読者としては、やはり昭王期およびそれ以降の時期の楚の太子が最も相応しいと言えよう。

結語

原積文を担当した陳佩芬氏は、冒頭の語句によつて、この篇の仮称を「平王與王子木」に定めたという。しかしながら、本文の内容は、平王と王子木（太子建）とに関するものではなく、王子木と成公幹（乾）との問答である。また、その主題も、平王と王子木との関係というのではなく、王子木の世間知らず、太子としての見識不

足、という点にあった。楚王となる人間には、それなりの知識が要求されるというのが、本篇の主張であろう。

とすれば、陳偉氏が、第一簡冒頭の「知」字を篇題ではないかと推測した点は、卓見であると考えられる。これまでに出土して公開されている竹簡文献の内、篇題の記載位置は、大きく二つに分けられる。一つは、竹簡の背面に記すものである。これは、竹簡を巻いて保存する際、背面に篇題があつた方が便利だからであろう。『子恙』『容成氏』『仲弓』『恒先』『内礼』『曹沫之陳』など多くの例が認められる。今ひとつは、冒頭簡の文頭に篇題を記すものである。郭店楚簡『五行』には、第一簡冒頭に「五行」とあり、その後、本文が開始される。本篇の篇題も、この例に該当すると考えて不自然ではない。もつとも、これまで確認されている篇題の中で、一字のものはなく、その点、「知」一字で篇題となるかどうかには一抹の不安も残る。しかし、本篇の内容は、確かに太子の「知」である。

この「知」字が篇題であるかどうか。この問題についてはさらに慎重な検討を要すると思われるが、この文献において、楚の太子としての知性が問われていることは間違いない。

なお、こうした文献が戦国楚簡に見えることは、王権

に対する教戒をまとめた故事集が、早くも春秋時代に成立していた可能性を示唆しているであろう。劉向が漢代帝王学の書としてまとめた『説苑』の先駆的存在として、これらの文献は大いに注目される。

注

(1) 『上海博物館藏戦国楚竹書』第六分冊の写真版では、「知」の下にかすかに墨釘が見えるので、ここでは、墨釘の符号を入れた。但し、原釈文では特にこの旨の注記がない。

(2) なお、以下に引く諸氏の見解は、すべてインターネット上に公開されているものである。ここでは繁瑣を避けるため、氏名と要点のみを掲げる。論文タイトル、掲載日などの詳細については、「簡帛網(武漢大學簡帛研究中心)」(<http://www.bsm.org.cn/index.php>)、「簡帛研究」(<http://www.jianbo.org/>) 参照。

(3) 但し、『平王與王子木』第四簡は、ちょうど「邦國不得」で終わっており、しかも、墨節などの符号が見えない。先述の通り、この後、別簡に『説苑』のような結末が記されていた可能性もある。

(4) 池田秀三『説苑』(講談社・中国の古典、一九九一年)、高木友之助『説苑』(明徳出版社・中国古典新書、一九六九

年) 参照。

(5) 注(4) 前掲書の他、趙善詒『說苑疏證』(華東師範大学出版社、一九八五年)等を参照。

(6) 上博楚簡『莊王既成』の詳細については、本誌掲載の拙稿「上博楚簡『莊王既成』の「予言」参照。

(7) 上博楚簡『昭王毀室』『昭王與龔之罪』の詳細については、拙稿「父母の合葬—上博楚簡『昭王毀室』について—」(『東方宗教』第一〇七号、二〇〇六年)、「語り継がれる先王の故事—上博楚簡『昭王與龔之罪』の文献的性格—」(『中国研究集刊』露号(第四十号)、二〇〇六年)参照。なお、これらは、『上博楚簡研究』(湯淺邦弘編、汲古書院、二〇〇七年)に収録し、また中国語に翻訳したものを、拙著『戰國楚簡與秦簡之思想史研究』(台湾・万卷楼、二〇〇六年)にも収録している。

〔付記〕

本稿は、平成十九年度日本学術振興会・科学研究費補助金基金研究(B)「戦国楚簡の総合的研究」(研究代表者・湯淺邦弘)による研究成果の一部である。